

## OSAKA夢プログラム発足趣意書

織田幹雄さん、南部忠平さん、孫基禎さん、田島直人さん、高橋尚子さん、室伏広治さん、野口みずきさん、オリンピック陸上競技金メダリストは、我が国がオリンピックイイベントに初参加した一九一二年ストックホルム大会以来百年余りの歴史においてわずか七名しかおりません。銀メダリストは七名、銅メダリストも八名とリレー一種目に過ぎません。女性では、一九二八年アムステルダム大会八〇〇メートル銀メダリストの人見絹江さん以後は、一九九二年バルセロナ大会銀メダリストの有森裕子さんまで実に六十四年の歳月を要しました。また、金メダルを獲得する二〇〇〇年シドニー大会の高橋尚子さんまでは第一回アテネ大会から一〇四年の時を要したのです。

他方、一九六四年東京大会男子マラソン銅メダリスト円谷幸吉さん以後の十個のメダルのうち、七個はマラソンが占めています。そのうちの四個は女性メダリスト。この実績の背後には、マラソン選手を競技団体と手を携えて育成してきた民間企業の偉大な貢献を忘れてはなりません。世界が日本に倣えと言われた日本女子マラソン黄金時代、日本選手の活躍は日本の官民をあげての強化の結実と言えるのです。

では、二〇二〇年東京オリンピック・パラリンピック、ホスト国日本としては、どのようにしてメダル獲得を成し遂げていくのでしょうか。

二〇一四年十二月国際オリンピック委員会は、五輪アジェンダ二〇二〇を採択しました。開催都市以外の分散開催などを認めるオリンピック改革に踏み出したのです。この改革が進められる中、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会は、オールジャパンでの東京二〇二〇の成功を描いています。まさに、大会の成功は、国を挙げて世界トップレベルのアスリートを育成し、メダルを奪取できる「強いチーム日本」作ることに尽きるでしょう。それこそが、オリンピックを国民的な盛り上げのもとに成功させていく原動力になると確信します。これを成し遂げるためには、国、地域が総力を挙げて取り組んでいかねばなりません。

少子高齢化で活力低下が危惧される今世紀、日本が経済活力を維持・発展させ、豊かな社会を次代に引き継いでいくには、強い地域社会づくり、何よりもその社会を担う強い人づくりが求められているのではないのでしょうか。

今こそ、大阪の産、官、学が連帯して、地域を挙げてメダリストを輩出する強化施策を打ち立てる好機です。技術、人材において世界に冠たる実力を有し、知識集約型の経済・学術基盤を形成している関西・大阪にあって、スポーツにおいても世界をリードする人材育成は必ずや成し遂げられると信じます。それには、人材発掘、科学的なトレーニング、指導者と組織化された支援体制が必要です。どれを欠いても世界に打ち勝つアスリートの育成はできません。体系化された「ひともの・かね」の支援が不可欠です。

ここに当協会は、前述の目標を達成するために、世界を狙い得る将来性のある精鋭アスリートを選抜し、新たな枠組みの「OSAKA夢プログラム」の立ち上げを提案いたします。

つきましては、日頃より当協会の活動に深い理解いただいております皆様方に、このプログラムへの賛同、協力とともに、資金面でのご援助をお願いいたしたく存じます。詳細は別紙に記しておりますので、格別のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成二十七年八月六日

一般財団法人大阪陸上競技協会  
会長 松本正義